

【実践報告】

若年層に向けた来館意欲を高める事業について

大  
柳  
麻  
美

【実践報告】

若年層に向けた来館意欲を高める事業について

大柳 麻美

【キーワード】

教育普及 博学連携 探究的学習

【要旨】

二〇一七・二〇一八・二〇一九年に改訂された学習指導要領では、これまで以上に博物館の活用が求められるようになった。そのような中、当館においても博学連携を強化するとともに、児童生徒・学生も含む若い世代（一〇・二〇代）を対象とした事業への取り組みを一層重要視することが求められている。しかし、二〇二二年度に当館を訪れた学校団体の利用状況の分析から、博物館の活用方法が教員に十分に周知されていないということとともに、高校生の活用が少ないことが分かった。この状況を背景に、当館が行っている博学連携を意識して実施している教員を対象とした講座や、高校生、大学生を対象とした講座の事例を紹介する。

はじめに

博物館での学びをより充実したものにするため、今日では様々な分野の博物館が、資料を活かした教育普及プログラムを実践している。筆者は当館企画普及課に所属し、講演・講座・体験教室といった行事や学校に対する学習支援などの教育普及事業に携わる職務にあたっている。当館は神奈川県内に限らず、県外からも多くの学校団体に活用されており、小・中・高と学年別に常設展示見学のワークシートをホームページで公開している。ワークシートを利用する児童生徒の様子を展示室で観察すると、資料そのものではなく、キャプションの情報をワークシートに記入して満足している様子が多々見受けられる。

資料そのものが展示されている博物館にも関わらず、児童生徒たちの学習に、資料が有効に活用されていないようだ。その改善には教員にも資料を効果的に活用する方法を知ってもらう機会が必要であり、当館も資料を学習してもらうための取り組みを一層強化すべきである。

また、二〇一八年には高等学校の学習指導要領が改訂され、二〇二二年度から「探究的な学習」として、生徒自らが問題意識をもって解決策を導く学習方法が実践されるようになった<sup>1)</sup>。学習指導要領にも博物館の活用だけでなく、調査などへつなげる具体的な活動が学校に求められている。一方で、当館の二〇二二年度の学校団体の利用状況を分析してみると、高等学校の活用が少ないことが分かった。このような結果を受けて、本稿では当館が小・中・高・大学生に対する普及活動の取り組みとして行った講座の事例を紹介する。

一 学校団体の博物館の利用について

まず、二〇二二年度に当館を訪れた学校団体の利用状況を示し、分析を行った。新型コロナウイルスの警戒態勢が緩和されたことよって、学校団体の博物館利用が前年よりも増加した。

(1) 分析

【表1・表2】

- ・ 県内の合計利用者数は八六一八名、県外の利用者数は四九三二名となり、県内にある小学校、中学校、高等学校、特別支援学校は県外に比べて利用が多く、特に中学校の利用が多い。
- ・ 高等学校の利用は神奈川県内、二八校・六六八名だが、県外は五九校・一三三二名と県外の方が多い。

【図1】

- ・ 当館のホームページでは来館にあたって事前申込書をFAX送信後、電話にて連絡をするようお願いしているため、小学校、中学校は事前連絡のある学校が多い。小学校三校はFAX、四二校は電話連絡をして見学に訪れている。教員が博物館の下見をするケースは電話連絡の半分以下の二二校となっている。
- ・ 中学校、高等学校も同様に教員が下見をするケースは少ない。

(2) 考察

【表1・表2】

これらのデータを比較してみると小学校、中学校は県外に比べて県内の学校団体に多く利用されており、高等学校は、県外の利用が県内よりも多いことが分かる。授業で博物館を活用するのではなく、宿泊を伴う

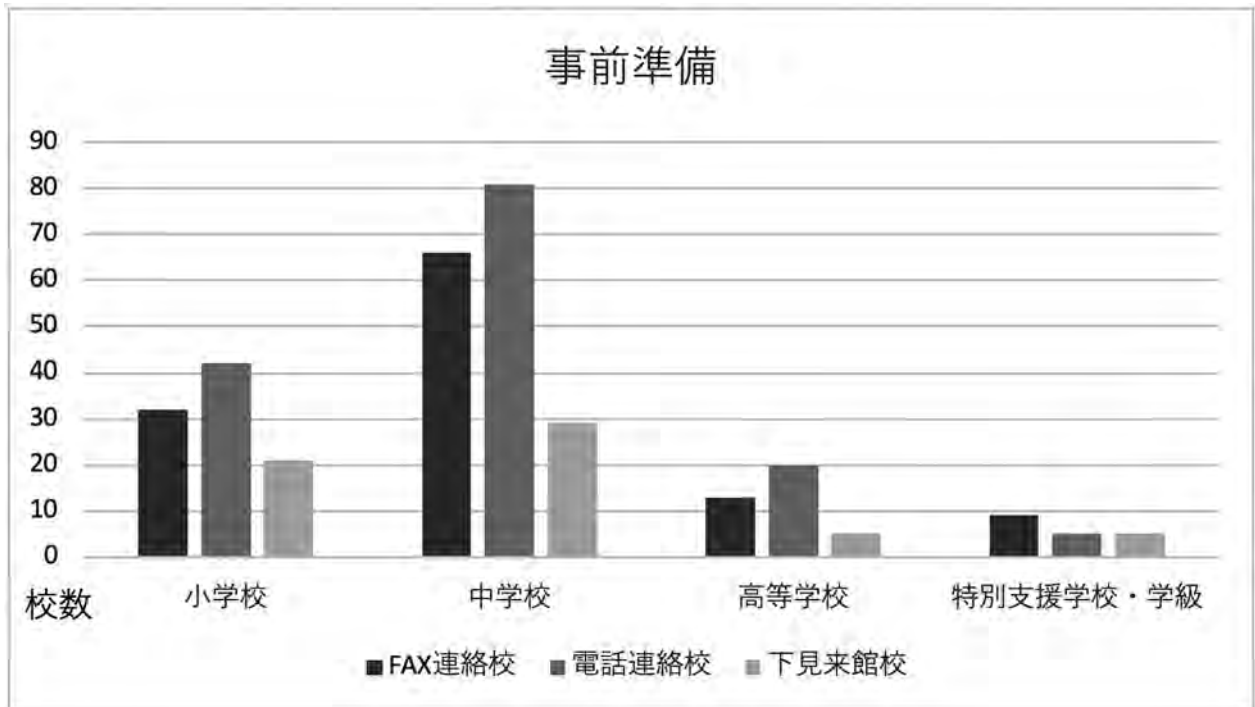


図1 見学のための事前準備について 『神奈川県立歴史博物館年報 令和4年度』より作成

表1 神奈川県内 小・中・高等学校及び特別支援学校等の利用状況 『神奈川県立歴史博物館年報 令和4年度』より

	小学校		中学校		高等学校		特別支援学校・学級		その他		県内合計	
	校数	人数	校数	人数	校数	人数	校数	人数	校数	人数	校数	人数
4月	2	103	2	88	8	223	0	0	0	0	12	414
5月	0	0	34	1,345	5	78	1	4	0	0	40	1,427
6月	4	296	25	1,174	3	55	0	0	1	1	33	1,526
7月	3	205	2	80	1	5	0	0	2	30	8	320
8月	1	95	2	12	2	5	0	0	0	0	5	112
9月	5	365	6	299	1	14	1	2	0	0	13	680
10月	1	33	2	16	2	205	2	6	0	0	7	260
11月	7	584	13	760	4	59	1	4	2	4	27	1,411
12月	7	446	8	425	0	0	1	7	0	0	16	878
1月	3	211	12	712	0	0	0	0	0	0	15	923
2月	7	400	4	81	1	22	4	37	1	8	17	548
3月	0	0	2	117	1	2	0	0	0	0	3	119
合計	40	2,738	112	5,109	28	668	10	60	6	43	196	8,618

表2 神奈川県外 小・中・高等学校及び特別支援学校等の利用状況 『神奈川県立歴史博物館年報 令和4年度』より

	小学校		中学校		高等学校		特別支援学校・学級		その他		県内合計	
	校数	人数	校数	人数	校数	人数	校数	人数	校数	人数	校数	人数
4月	0	0	3	53	11	265	0	0	0	0	14	318
5月	0	0	13	514	13	322	0	0	0	0	26	836
6月	1	71	5	83	9	248	0	0	0	0	15	402
7月	0	0	2	49	1	6	0	0	0	0	3	55
8月	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
9月	0	0	6	248	2	43	0	0	0	0	8	291
10月	2	142	6	80	8	333	0	0	0	0	16	555
11月	4	199	14	288	7	84	0	0	0	0	25	571
12月	0	0	11	264	6	25	1	7	0	0	18	296
1月	0	0	9	377	1	3	0	0	0	0	10	380
2月	3	204	20	625	1	3	2	8	0	0	26	840
3月	1	24	12	364	0	0	0	0	0	0	13	388
合計	11	640	101	2,945	59	1,332	3	15	0	0	174	4,932

学校行事での活用が多いことが推測される。

県内の小学校、中学校に比べ、高等学校の利用が格段に少ないことは課題である。

二〇二二年度から高等学校の学習指導要領の実施により「日本史B」と「世界史B」が廃止され「歴史総合」、その翌年から「日本史探究」「世界史探究」が新歴史科目として導入された。これらは生徒自身が探究テーマを設定し、問いを立て資料を読み取り、表現することが目指される。新学習指導要領においても「年表や地図、その他の資料を積極的に活用し、文化遺産、博物館や公文書館、その他の資料館などを調査・見学したりするなど、具体的に学ぶよう指導を工夫すること。その際、歴史に関する諸資料を整理・保存することの意味や意義に気付くようにすること。また、科目の内容に関係する専門家や関係諸機関などとの円滑な連携・協働を図り、社会との関わりを意識した指導を工夫すること」と明示され、博物館資料の活用と、博学連携の重要性が以前に比べてより高まったこともあり、高校生が博物館に興味を持つ活動を考えていくことや、博物館資料を授業で扱う教員に対してのアプローチが課題である。

#### 【図1】

本図から教員が下見をするケースが少ないことが分かる。教員が下見を行う場合、資料やワークシートなどの案内を当館の職員が直接行う。初めて来館する教員には、常設展示室を実際に案内する場合もあり、展示室の大きさや、どのテーマにどのような資料が展示されているのか予め把握することができる。そのため、教員が下見をしない場合、博物館活用にに関する情報を十分に得られていないと考えられる。博物館を有効に活用するためには、教員が一度は博物館を訪れ、展示室を見学し、児童生徒に何を学ばせたいのか考える時間をつくることが重要だ。

## 二 当館の教育普及活動の取り組みについて

### (1) 教員向け講座の実施

ここまで記したように、当館は来館する小・中・高生を受け入れており、以下のような取り組みを行っている。二〇〇〇年に「総合的な学習の時間」への対応が新たに進められ、校外学習、職場体験、体験型学習など学校との連携事業を支援した。二〇〇一年から教育普及事業の一環として毎年「教員のための博物館講座」を実施している<sup>3)</sup>。二〇〇二年には「学校連携・総合的な学習の時間への対応」から事業を拡大し、「見学の学校の博物館利用に対する対応」とし、教員が常設展を活用しやすくなるよう「常設展資料一覧」の作成や「教員向けの研修会」などを実施し、教員に対する支援を行った。

### (2) 出張講座

当館の出張講座は、神奈川県内の小学校、中学校、高等学校及び、特別支援学校等に学芸員が講師となり学校を訪問して授業を行うものである。この取り組みは当館が二〇一六年からの改修工事のため、休館中に学校連携の一環として始めたものだ。申し込みを受け、開催が決まると、担当学芸員が当日の講座の進め方や内容等について学校に訪問して打ち合わせを行う。短い授業時間の中で、教員が講座に求める主旨や児童生徒の関心を引くための工夫、クラスの雰囲気など、教員と事前にコミュニケーションをとることで、学芸員も教員のニーズや児童生徒の実態を把握でき、当日の講義に役立てている。

二〇二二年度は、一八校が利用し、特に小学校六年生を対象とする講座が一四校あった。小学校では六年生から歴史の授業が始まるため、利

用が多いと推測される。人気ある講座は毎年異なるが、二〇二二年度は、「鎌倉大仏になってみよう」の利用が多い。内容は、神奈川の仏像、特に鎌倉大仏について、形の意味や服装を実際に真似してみようという体験型の授業である。歴史に関わらず博物館、学芸員の仕事について紹介する講座もあり、学芸員の主な仕事や、当館の博物館活動について紹介するものである。様々な博物館・美術館で出張講座は行われており、博物館活動におけるアウトリーチ活動として認知度は高いように感じる。一方で、出張講座を利用した教員の担当学年が代わることや、他校へ異動してしまうことで、学校との連携が継続的に行えない場合があるのは課題の一つである。

### (3) 大学生の見学実習の受け入れ

常設展、特別展の見学に加えて、学芸員の解説を聞くことができる。本実習では博物館実習とは異なり、大学の授業の一環として教員の引率のもと半日などの短時間で行われる。学芸員がバックヤードの案内や展示解説、資料の取扱い等をレクチャーする。二〇二二年度の見学実習では、合計で二五二名が来館した。多くは学芸員課程を履修している学生である。

### (4) 中学生の職場体験・高校生のインターシップの受け入れ

二〇〇六年より、神奈川県教育委員会高校教育課を通して、三日間高校生とのインターシップの受け入れを実施している。二〇〇六年以前は、総合的な学習の時間（就業体験、職場訪問等）への対応としていた。当館では、博物館の仕事をより具体的に知ることを目的としている。担当学芸員によってプログラムは異なるが、一日目に、当館の概要やバック

ヤードツアーを通して、博物館の役割や使命について学び、二日目は資料のクリーニングや、保存・整理の手伝いを行う。三日目は、講座の準備や来館者の案内、興味を持った作品について展示解説を行うなど、教育普及業務を体験する。中学生の職場体験は、直接中学校から連絡を受け、そのニーズと当館の予定が合えば実施している。

### (5) 神奈川県高等学校社会科部会歴史分科会日本史推進委員会との連携

神奈川県内の高等学校の教員が所属する教科研究会の一つで、地歴科を担当する教員が「歴史総合」や「日本史探究」に向けた教材研究・活動を行いながら、研究成果を発表している。学芸部を中心に二〇二〇年度末から日本史研究推進委員会と連携をはじめ、年に二、三回の例会を当館で実施し、会期中の特別展見学に加え、教材となりうる資料について担当学芸員との意見交換や、教員が行う博物館資料を活用した授業の発表に対し、当館の学芸員が助言をするなどといった教材開発も行われている。

筆者は、例会に一度参加し教員が授業の中で実践的に博物館資料を扱う難しさと、探究的な学習方法について悩む状況を目の当たりにした。後述する高校生向け連続講座は、この懇談会をきっかけに、新歴史科目を意識して実施した。教員と学芸員が直接コミュニケーションを図ることで、博物館側も新しい講座の開発へつなげることができる点は大きなメリットである。

以上の五点の取り組みは、今後も実施していきたい。残念ながら、当館は若い世代の来館者が少ないのが特徴でもあるため、博物館と学校現場をつなぐ活動を継続できるように、広報活動も積極的に取り組む必要がある。

博学連携事業が盛んになったきっかけとしては、二〇〇二年から開始された「総合的な学習の時間」の導入である。これを受けて当館でも同年に、神奈川県内にある高等学校の教員と嶋村元宏（現・主任学芸員）が連携し、日本史Bの指導要領をふまえた博物館資料を活用する授業が展開された。二〇〇二年に発行された神奈川県博物館協会の会報では「学校の博物館利用」についての特集が組まれ、博学連携事業についての重要性を発信した。

他館でも学校との連携事業を普及するべく取り組みは広く進められ、教員を対象とした講座が多く展開されるようになった。例えば、神奈川県立生命の星・地球博物館では、子どもたちが直接化石体験を得る機会として行った化石を含む岩石資料を学校に貸し出す「化石ロッキット」活動を派生させて教員へ対する教育活動へ重点を置いた。一九九八年より教員へ向けた研修的な集中講座にはじまり、段階をふみながら二〇〇一年には教材化を意識した「先生のための化石入門」へと変更された。教員に寄り添ったかたちへと改善し、博物館資料を活用した有効的な活動である。

教員を対象とした当館の講座は、内容をブラッシュアップして継続するのではなく、担当する学芸員が毎年変更し、様々な分野の講座を行っている。

### 三 教員・高校生・大学生講座の取り組みと課題点—当館の場合—

#### (一) 教員のための博物館講座

この講座は、教員が参加しやすい夏休みの時期に開催し、複数の学芸員のレクチャーを受けながら、博物館への理解を深め、学習への活用を促すのが狙いである。参加方法は、県立総合教育センターにて教員の



写真1 教員のための博物館講座の様子

経験年数に応じて行われる基本研修選択としての申し込みと、教員の自己研鑽のための受講申し込みがある。二〇二二年度の参加者は一回目二十名、二回目は十六名であり、小学校から高等学校までの幅広い校種、教科担当の教員が参加した。一回

目の参加者のうち五名は五年経験者のため、「社会体験研修」として参加した。プログラムは、博物館のバックヤードツアー、常設展・特別展の見学、展示解説、展示資料を活用した教材化のワークショップなどの体験である。展示資料を活用したワークショップでは、一日目は古文書資料、二日目は美術資料を活用した授業の実践を、それぞれ専門の学芸員がレクチャーした（写真1）。

実際に講座の様子を見学していると、教員たちは講座が始まる前「博物館をどう活用したら良いか分からない」や「博物館に自分自身があまり行かないため、子どもたちを引率する自信がない」など博物館に対す

るマイナスイメージを持つている印象があった。実際に博物館に訪れる教員も、「下見に来る時間がなかった」や「今までに博物館を活用したことがない」と話すことが多く、児童生徒を見ても社会科見学や社会科的教科の授業の中で博物館に訪れてはいるが、単に展示室を見学するか、ワークシート（当館で公開しているもの・各学校で準備されたもの）に調べて分かったことを記入する。特に、解説（キャプション）をそのまま写し、資料自体を観察していないことが多い。見学時間が限られた中で、ワークシートに書かれている問いの答えを探すことが目的化し、「キャプションを探す」行為が目立っていた。

教員自身も歴史系博物館は、資料やキャプションを見ただけでは、歴史上の相対的な価値などの理解が難しいという先入観が見受けられ、博物館活用の障壁になっているようだ。実際に展示解説やワークショップを教員自身が体験してみると「短い時間の中でも解説を聞くと作品のことがよく理解できた」や「資料の見方を知ることができた」「教科書に載っているものだから児童が関心を持ちそうだ」などの感想があり、博物館の資料が教材になることが身近に感じられ、博物館に対するイメージが変化したようだ。

このような博物館体験を踏まえれば、教員もより充実した校外学習の計画を練ることができるのではないだろうか。一方、博物館側には学校がどのようなことを望み、協働で授業を実施したいのか、博物館見学を単元にどのように位置づけているのかなどについて理解をし、その手立てを用意する必要がある<sup>7)</sup>。そのため、例えば、学年に応じた学習指導要領の理解を深めることや、教材となりうる資料を取りまとめて学習プログラムを開発することは急務である。

## (2) 高校生向け連続講座「浮世絵に親しむ」

当館には、見どころの一つとして横浜で貿易商として活躍した丹波恒夫氏が収集した約六二〇〇点に及ぶ浮世絵コレクションがある。定期的に展示替えを行っている常設展で作品を鑑賞することができる。今回の講座は、「博学連携」を模索する中で、高等学校において新たに「日本史探究」が開始されることを踏まえ、当館の企画普及課長・学芸員である桑山童奈が企画し、浮世絵に関心を持つ高校生に向けて二〇二二年に初めて実施した<sup>8)</sup>。筆者は、高校生が親しみを持てる作品の選定や、配付資料の作成、当日の講座運営に携わった。講座では、開港当時の横浜の街が描かれた横浜浮世絵を取り上げた。参加者は県内の高校生六名と教員一名であった。

一日目は「浮世絵を見る」をテーマに浮世絵の制作方法やジャンルなど浮世絵の歴史を座学で学んだ後、展示室で学芸員の解説を聞きながら資料を鑑賞した（写真2）。参加者はこれまで浮世絵を鑑賞する機会が少なかったよ



写真2 学芸員のレクチャーを受けている様子





写真3 復刻版浮世絵の観察



写真4 「英吉利船」 神奈川県立歴史博物館所蔵

うだが、版元印や改印など学芸員から浮世絵を鑑賞する際に注目すべき点や、浮世絵の人気のジャンルなどのレクチャーを受けると、展示室では作品を遠くから眺めたり、展示ケースに近寄って細かい文字を観察し、鑑賞するポイントをそれぞれ見つけることができた様子であった。また、復刻版の浮世絵で、細かな髪の毛の生え際や、色鮮やかな着物の文様に注目して鑑賞した。手に取って動かすとキラキラとしているのが分かる雲母摺の施された絵に関心を持ち、浮世絵の見方を学ぶことができた(写真3)。

二日目は「浮世絵を知る」をテーマに浮世絵に描かれている文字を読

み解き、江戸時代の浮世絵双六に描かれる横浜の名所を紹介しながら地図や写真など活用して、明治から現代に至る横浜の街の移りゆく様子を学んだ。

浮世絵に描かれた文字を読む体験がメインとなり、今回取り上げた作品は歌川芳虎の錦絵「英吉利船」である(写真4)。画面上部には、「イギリスの造船は世界の様々な国が真似してつくる」ことなどが書かれた仮名垣魯文の文章、中心には大きなイギリスの船、左上にはイギリス人の顔が表現されている。イギリス船への憧れが長文とともに画角いっぱい描き込まれており、開国を通して異国との出会いが当時の日本人

にとって大きな衝撃を与えた様子が伝わる作品である。参加者は実際に文章を読む作業を体験すると、「漢字は分かるけど、平仮名は難しい」や「今の言葉と表記が違う部分がある」など、話し合いながら三〇分ほど時間をかけてくずし字を解読した。鑑賞の対象と分類されがちな浮世絵が文字を読むことで情報の収集や、当時の人々の気持ちを理解する手掛かりになると感じたようだ。文字の解読後には額装された「英吉利船」を間近に観察し、印刷されたものと資料を比較して「本物は色が違う」や「よく見ると紙に穴が開きそうになっている」など作品と向き合う中で気づきが見つかり、紙資料の取り扱いについても学芸員からレクチャーを受けた(写真5)。



写真5 額装された「英吉利船」を観察する様子

表3 高校生向け連続講座「浮世絵に親しむ」アンケート結果

<p><b>二日間を通して1番印象に残った活動はなんですか？</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・英吉利船の文字の解読(3名)</li> <li>・1日目の浮世絵に関する講義全体</li> <li>・復刻版浮世絵の観察</li> </ul> <p><b>浮世絵講座の感想</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・浮世絵は楽しむためにみるものということだけのイメージしかなかったが、細部まで目を通すことで、時代背景やそのときの出来事、人物のことが理解できた。</li> <li>・背景動機を必要とするのが難しいと思った。 また、実際の浮世絵を間近で見られるのはとても貴重な体験だった。</li> <li>・難しかったことは、浮世絵に書いてある文章を読む活動。 楽しかったことは、浮世絵の細かい所に書いてある所を見たりする活動(女性が既婚か未婚かなど)</li> <li>・昔の仮名文字を読むのが難しいと感じた。 解説などは分かりやすくてすばらしいと思った。</li> <li>・人によって同じものでもまったく違うことが面白かった。 ひらがなの解読が難しかった。</li> </ul>
--

された。しかし、先に述べたように高校生の博物館利用が少ない現状は、今後当館でも取り組むべき課題である。

最終日に記入されたアンケートから、二日間を通して最も印象に残った活動は「英吉利船」の文字の解読であり、新しい浮世絵の見方を知った様子が伺える。また、浮世絵を初めて鑑賞する学生が多かったため、学芸員の解説をじっくりと聞き、鑑賞するポイントをおさえたいうえで、作品を観察できた点や、展示室での見学とは違い、復刻版浮世絵、本物の資料を様々な角度から間近で観察したことも新鮮な体験となったことが分かった。講座を体験した学生たちのアンケートは左にまとめる(表3)。

(3) 大学生向け体験講座「博物館の裏側を知ろう」

若年層に博物館の活動について関心を持ってもらうことを目的に大学生向けの体験講座を実施した<sup>10)</sup>。普段展示室にある作品がどのような作業を経て収蔵庫から展示室へと展示されるのか、学芸員が行う仕事の一部を体験することで、博物館や学芸員への関心がより高まるのではないかと考えて筆者が企画し、本年六月に実施した。先にも述べた高校生向けの浮世絵講座を踏まえて、資料の状況を確認し、その状況を調査へ記載することや梱包などの体験活動を取り入れた。過去に東京国立博物館では高校生向けに、物流博物館では大学生や高校生向けに梱包講座が実施されており、本企画を実施するうえで参考とした。

当館の場合、大学生を対象とする行事は、博物館実習や見学実習の受け入れ等が多く、博物館のイベントとして、大学生を対象とした講座は初めて行った。筆者は、バックヤードツアーと常設展示室の案内を担当し、陶磁器の調書作成や梱包体験のレクチャーは、工芸担当学芸員である鈴木愛乃が行った。参加者は神奈川県内と都内の大学生一〇名(うち一名は高校生)である。

前半に行ったバックヤードツアーでは、ミュージアムライブラリーや、ショップ、事務室等を見学し、博物館には、学芸員だけではなく、事務、広報、教育普及、司書やデジタルアーカイブの作成、ボランティアに携わる職種があることなどをそれぞれ紹介した。特に図書整理室では、蔵書の数や普段の仕事内容について司書から直接話を聞いた。全国の展覧会図録を保管しており、博物館の情報をいち早く知ることができる点が、博物館施設にある図書室の強みであり、一般的な図書館との違いであることができた様子であった(写真6)。

常設展示室の見学では、各展示室の概要と、資料を守るための取り組

みを伝えた。当館の常設展は「かながわの文化と歴史」をテーマに三階が古代・中世、二階が近世・近代・現代・民俗の五つの分野に分かれて展示を構成している。三階の文書資料の前で、「キャプションを見て何か気づいた点はあるますか?」と質問を投げかけてみ

ると「この辺りは、ほぼ複製と書かれている」と気づいた学生がいた。三階の中世コーナーは、仏像や文書資料など、寺院や神社に伝えられ、当館で所蔵できない資料が多い。常設展示室では誰がいつ来ても神奈川の歴史を学べることを目的としているため、歴史を語る上で必要ではあるが、所蔵できないものは、レプリカを用いて展示をしている。

その後、円覚寺舍利殿の実寸大模型を見学した。国宝に指定されている鎌倉の舍利殿は年に数回しか一般公開されないため、普段は中を見学することができないが、博物館では常時舍利殿の中を見学することができる。大きさや装飾など、実際に体感することができ、複製資料のマ



写真6 バックヤードの見学



写真7 常設展の見学

イナスな点だけでなく、利点についても紹介することができた。次に、江戸時代の絵図や地図、浮世絵が展示される二階では紙資料が多いため、展示室の照明がより暗い。「なぜ展示室が暗いと思う？」と質問を投げかけながら考えさせた。「資料を守るため」や「三階と比べると展示ケースの中がより暗くなった」と発言した学生もあり、資料の劣化を最小限に防ぐため照明を暗くしていることや、温湿度計をケース内に置いて管理していることなどを説明した(写真7)。

常設展示室の見学だけでなく、資料を守るための取り組みを合わせて紹介することで、より学芸員の仕事の裏側を知ってもらう機会となった。事前に住んでいる地域や大学の所在地を把握しておく、学生にとって

身近な地域を中心に解説を行うことができ、より充実した見学ができたのではないかと反省点もあるが、日頃の見学では得られない、特別な体験が博物館への関心につながったようだ。後半は、学芸員の仕事についての概要紹介をし

た後、実際に工芸資料の調書作成、梱包体験を行った。今回は大きさや重さが異なる陶磁器を用意し、二人一組で作業した。始める前に、アクセサリーや時計を外すなど、作品の安全性を考えて身だしなみを整える必要があることを説明したうえで、調書作成を行った。まずは、作品がどのような資料であるのか、あらゆる角度から観察し、スケッチをした。次に、傷がついている箇所がないか、文様の特徴などをチェックして調書に記す。一人が作品を持ち、もう一人が観察した。作品を安全に取り扱うためには、二人がしっかりとコミュニケーションをとることが重要であることを理解できたようだ(写真8)。

調書をとった後、学芸員が当館所蔵の陶磁器を使って、開梱から梱包の一連の流れを行ってみせた。梱包に使用される薄葉紙や梱包用の綿布団は、授業内で聞いたことはある様子であったが、実際に扱うのは全員初めてだったようで、調書を基にした「器の縁部分はうすいから頑丈にしよう」「桐箱の中で動かな



写真8 調書作成の様子



写真 9-1 梱包体験の様子



写真 9-2 梱包体験の全体の様子

いように、布を一枚敷こう」など声をかけあって、資料に負担をかけないように丁寧に梱包している様子であった(写真9-1・2)。また、学芸員が一組ずつまわりながら、真田紐の結び方も指導し、開梱から梱包までの一連の流れを体験した。

講座に参加した学生のアンケートから、最も印象に残った活動はバックヤードを見学できたことと、資料の梱包作業ということが分かった。前半で展示室が暗い理由や、レプリカを展示していることなど、博物館の小さな疑問にふれたことで、後半で行った資料の取扱いについてより理解が深まったようだ。座学では得られない体験活動を通して学芸員の仕

事の一部を知ることができたという感想もある。学芸員資格の取得を目指していない学生にも博物館や学芸員の仕事について関心を持ってもらうことを目的に実施した本企画は、目標を達成できたように感じる。来年度は扱う資料の変更や、対象年齢を広げることなどを検討しつつ、継続的に実施できるよう努めたい。講座を体験した学生たちのアンケートは以下にまとめる(表4)。

高校生と大学生の若い世代に向けた講座を通して、二点の発見があった。一つ目は、講座へ参加する動機の違いである。高校生の場合、生徒自らの応募はなく、教員が窓口となり関心ある学生に情報を伝えていた。一方で大学生の場合は、大学にて学芸員課程を履修し、学芸員を目指している学生や、学芸員の仕事内容を知りたいなど、自身で講座を探しており、参加する目的を持っていた。当初予定していた人数を大幅に超える応募があった。また、コロナ禍で大学へ行くことができない時期もあり、資料に触れる機会や実践的な活動が少なく、実習の予習ができる体験をしたかったなどの声もあった。講座を知った情報源については、当館のホームページだけでなく、SNSや家族・知人からの情報があげられた。高校生の浮世絵講座の場合、同じ学校の生徒のみの参加であったため大学生向け講座と同一形式のアンケートは取らなかったものの、まだ自ら博物館の情報を収集し、積

表 4 大学生向け体験講座「博物館の裏側を知ろう」アンケート結果

#### 大学生向け体験講座の感想

- ・普段見ることができないバックヤードや、博物館の裏側の話を聞くことができさらに学芸員に興味を持つことができました。  
また機会があったら参加したいです。
- ・博物館の展示室が暗い理由や、レプリカがある理由など、気になっていたことを知れて良かったです。  
また、作品の扱い方など、初めて知れたことがたくさんあってとても良い経験になりました。
- ・4月から横浜で一人暮らしをしています。この講座で博物館の裏側だけでなく、横浜についても知ることができました。  
また、体験ができたことはこれからの実習などでとても役に立つので忘れずにこれからは生かしていきたいです。  
1年の後期から博物館学芸員課程を履修でき、2年から選抜になるため、がんばりたいとさらにこの講座で思いました。
- ・県博の展示の仕方についてよりくわしく知れたので良かった。  
又、梱包という作業を今までやったことがなかったため、貴重な機会となった。
- ・普段大学で学芸員課程を履修しているため、博物館についての勉強はしていますが、資料の梱包作業の体験や学芸員の方の道具を見せていただいたり体験談を伺う機会は初めてだったため、とても勉強になりました。  
貴重な経験をさせていただきありがとうございました。
- ・とても楽しかったです！実際に館内を歩いたり陶芸品に触って、といったような実習があって非常にタメになりました。大学生向けだったので高校生の私が参加して良かったものか難しくないかと心配でしたが、内容も分かりやすく参加して良かったと思えます。博物館の裏側を見るのは初めてだったのでとてもワクワクしました。
- ・バックヤードなど学芸員側から博物館を見ることができて面白かった。  
実際に調書を書いてみることで、座学だけでは分からないことも実感をもって経験でき貴重な体験になった。  
紐のしぼり方などは普段の生活から活用していきたいと思う
- ・作品調査と梱包が印象的でした。作品を横にする時には薄葉紙を重ねたものを敷く等、普段物を扱う際に意識していないことがあり、学芸員の方々の資料への尊敬を感じられました。こうした細かい配慮が私達の社会教育を支えていると思うと感慨深いものがあります。
- ・普段見ることのできないバックヤードや書庫などを見学できたので学芸員のお仕事の様子を知ることができました。
- ・梱包方法や、計測についてなど座学の授業を受けることはあるが、今回のように実際に体験することはないため、貴重な時間でした。

極的に参加してみることは難しいと考えられる。

もう一点は、体験講座を通してものに触れる楽しさを体験したことが印象に残っているようだ。高校生向け連続講座では、浮世絵資料を通して「文字の解読」、大学生向け体験講座では、工芸品を通して「調書・梱包作業」体験を行った。実際にものを手にとって学ぶことは座学では学べない実在感がある。両者のアンケートをみても、体験活動に対して高い満足感が示された。

本年の夏休み期間には、昨年に続く高校生向け連続講座「浮世絵に親しむ」、更に特別展「関東大震災—原点は一〇〇年前—」(二〇二三年七月二九日から九月一八日)の関連イベントとして高校生・大学生向けの現地見学会「海上保安庁の測量船で知る海の防災」など、学生を対象とした講座を多数実施した。高校生に限らず来年度も若年層に向けた取り組みを継続していきたい。

#### おわりに

様々な館で取り組まれている教育普及の一環である博学連携事業は、高等学校での学習指導要領の改訂などにより、一層重要視されていくだろう。まずは、学生に向けた取り組みを継続的に実施しながら今一度、学校と博物館連携の課題を整理する必要がある。

併せて教員にも博物館の楽しさを知ってもらうために、博物館側が情報を継続的に発信し続けていくことが重要である。博物館に足を運ぶことが少ない学校教員に対する研修の充実と、若い世代、特に教員を目指す学生なども参加できる研修の場を設けることで、博物館が展示室にとどまるものでなく、様々な学習資源を提供できることを知ってもらう必要がある。学校側と博物館側のコミュニケーションや研修などが十分に

実施されなければ、互いのすれ違いが増すばかりである。

また、一方的にプログラムを提示するだけでなく、教員と協力して児童生徒の博物館学習を支援する必要がある。学習指導要領を理解し、学校が求めていることに対応する力をつけることや、学校教育や教員の特性をより理解し、可能であれば教員経験のある教育活動担当の職員と協力し合い、新しい普及プログラムの開発に努めたい。

#### 註

- (1) 『今、求められる力を高める 総合的な探究の時間の展開(令和5年3月)』(高等学校編)参照。
- (2) 『高等学校指導要領(平成30年告示) 解説(地理歴史編)』参照。
- (3) 二〇二二年度の実施日は八月一日、一七日。
- (4) 神奈川県博物館協会『神奈川県博物館協会会報』第七三号、二十八頁、二〇〇二年。
- (5) 一九五五年から活動している県内博物館施設の任意団体で、博物館のPR、職員研修、会報の発行など各種活動を行っている。
- (6) 田口公則「博物館と学校の連携—化石ロケットプログラムの展開—」(特集)『古生物学のアウトリーチ—博物館での取り組みを例にして—』『日本古生物学会』九一—一〇頁、二〇〇八年。
- (7) 小川義和「博学連携は何のために」『生物教育—一般社団法人日本生物教育学会』六〇巻三号、一五六—一六〇頁、二〇一九年。
- (8) 実施日は二〇二三年八月一八日、一九日の二日間。
- (9) 丹波恒夫氏が名付けた、開港をきっかけに発展していく横浜の街や来日した外国人たちの姿、生活を描いた浮世絵を指す。
- (10) 実施日は二〇二三年六月二五日。